目　次

Ⅰ　東京の虚実――世界都市への野心……9
普請中……森　鷗外……11
人面疽……谷崎潤一郎……23
両国・立秋の日・築地の渡し 並序……木下杢太郎……55
東京の公園……田村俊子……63
魔　術……芥川竜之介……69
小僧の神様……志賀直哉……87

Ⅱ 東京スナップ――モダニズムの夢……105
招魂祭一景……川端康成……107
公園小品……室生犀星……127
滅びたる東京……佐藤春夫……141
泥濘……梶井基次郎……153
押絵と旅する男……江戸川乱歩……169

Ⅲ 東京の陰翳――発展と孤立……203
雨の降る品川駅……中野重治……205
水族館……堀辰雄……211
M百貨店……伊藤整……237

恐ろしい東京……夢野久作……257
除夜の鐘・正午……中原中也……265
鮨……岡本かの子……271
解　説（十重田裕一）　301
地　図　319
年　表　一九一〇～一九四〇　323

東京百年物語 2

一九一〇～一九四〇

I 東京の虚実

――世界都市への野心

「帝都の大玄関東京駅の壮観」(『最新大東京』青雲堂出版部，出版年不明／東京都立中央図書館蔵)

明治から大正へと元号が変わる1910年代は，東京の人口が以前にもまして増加し，都市機能が整備され，国際的な都市として大きく発展を遂げていく時期であった．日露戦争後の1908年，東京の人口は約260万人であったが，第1回国勢調査が行われた20年には，約370万人に膨れ上がる．1910年代，十余年の間に，東京の人口は100万人以上も増加したことになる．徳冨蘆花は『みみずのたはこと』(1913年)の中で，人口流入に伴う東京の膨張の印象を，「東京が大分攻め寄せて来た」と記している．人口が増加していくこの時期は，首都としての機能が整えられた時期でもあり，1914年12月の東京駅開業，23年2月の丸ノ内ビルヂング竣工など，まさに「日本はまだ普請中」(森鷗外「普請中」)であった．日露戦争の戦費負担は日本に多大な対外債務をもたらしたが，第一次世界大戦による海外からの物資需要の増大に伴い，維新以来，輸入超過を続けてきた日本の貿易収支はこの時期において輸出超過になり，対外収支の好況によって日本は債務国から債権国へと転じた．国際社会における日本の存在感が増すことによって，「東京」は“TOKYO”として，しだいに世界に認識されるようになるのである．

普請中

森鷗外

森鷗外(一八六二〜一九二二年)。石見国(現、島根県)生まれの小説家、評論家、軍医。本名林太郎。東京大学医学部を卒業後に陸軍軍医としてドイツへ留学し、帰国後は公職の傍ら多彩な文筆活動を展開した。小説・評論のほかにも、ヨーロッパ文芸の翻訳や演劇改良にも取り組み、日本の近代文学を牽引した。主な著作に、「舞姫」(一八九〇年)、「高瀬舟」(一九一六年)、「渋江抽斎」(同年)などがある。官吏としては、陸軍軍医総監、陸軍省医務局長、帝室博物館総長等の要職をつとめた。

「普請中」(『三田文学』一九一〇年六月)の舞台は、東京京橋の「精養軒ホテル」。当時実在したこのホテルは、開業当初から西洋料理を提供し、政財界の会合や外国人客の供応に利用されるなど、社交・外交の場にもなっていた。「普請中」は、この「精養軒ホテル」で再会した一組の男女の機微を描いており、ホテル室内にある調度品や建物の情景が巧みに織り込まれている。なお、鷗外は、東京を一望する地図『東京方眼図』(春陽堂、一九〇九年)の企画にも携わった。底本には『鷗外近代小説集 第二巻』(岩波書店、二〇一二年)を用いた。

渡辺参事官は歌舞伎座の前で電車を降りた。

雨あがりの道の、ところどころに残っている水溜まりを避けて、木挽町の河岸を、逓信省の方へ行きながら、たしかこの辺の曲がり角に看板のあるのを見たはずだがと思いながら行く。

人通りは余り無い。役所帰りらしい洋服の男五、六人のがやがや話しながら行くのに逢った。それから半衿の掛かった着物を着た、お茶屋の姉えさんらしいのが、何か近所へ用達しにでも出たのか、小走りに摩れ違った。まだ幌を掛けたままの人力車が一台跡から駈け抜けて行った。

果して精養軒ホテルと横に書いた、割に小さい看板が見附かった。

河岸通りに向いた方は板囲いになっていて、横町に向いた寂しい側面に、左右から横に登るように出来ている階段がある。階段は尖を切った三角形になっていて、その尖を切った処に戸口が二つある。渡辺はどれから這入るのかと迷いながら、階段を登って見ると、左の方の戸口に入口と書いてある。

靴が大分泥になっているので、丁寧に掃除をして、硝子戸を開けて這入った。中は広い廊下のような板敷で、ここには外にあるのと同じような、棕櫚の靴拭いの傍に雑巾が広げて置いてある。渡辺は、己のようなきたない靴を穿いて来る人が外にもあると見えると思いながら、また靴を掃除した。

あたりはひっそりとして人気がない。ただ少し隔たった処から騒がしい物音がするばかりである。大工が這入っているらしい物音である。外に板囲いのしてあるのを思い合せて、普請最中だなと思う。

誰も出迎える者がないので、真直に歩いて、衝き当って、右へ行こうか左へ行こうかと考えていると、やっとの事で、給仕らしい男のうろついているのに、出合った。

「きのう電話で頼んで置いたのだがね。」

「は。お二人さんですか。どうぞお二階へ。」

右の方へ登る梯子を教えてくれた。すぐに二人前の注文をした客と分かったのは普請中殆ど休業同様にしているからであろう。この辺まで入り込んで見れば、ますます釘を打つ音や手斧を掛ける音が聞えて来るのである。

梯子を登る跡から給仕が附いて来た。どの室かと迷って、背後を振り返りながら、渡

辺はこう云った。

「大分賑やかな音がするね。」

「いえ。五時には職人が帰ってしまいますから、お食事中騒々しいようなことはございません。暫くこちらで。」

先へ駈け抜けて、東向きの室の戸を開けた。這入って見ると、二人の客を通すには、ちと大き過ぎるサロンである。三所に小さい卓が置いてあって、どれをも四つ五つずつの椅子が取り巻いている。東の右の窓の下にソファもある。その傍には、高さ三尺許の葡萄に、暖室で大きい実をならせた盆栽が据えてある。

渡辺があちこち見廻していると、戸口に立ち留まっていた給仕が、「お食事はこちらで」と云って、左側の戸を開けた。これは丁度好い室である。もうちゃんと食卓が拵えて、アザレエやロドダンドロンを美しく組み合せた盛花の籠を真中にして、クヴェエルが二つ向き合せて置いてある。今二人位は這入られよう、六人になったら少し窮屈だろうと思われる、丁度好い室である。

渡辺はやや満足してサロンへ帰った。給仕が食事の室から直ぐに勝手の方へ行ったので、渡辺は始てひとりになったのである。

金槌や手斧の音がぱったり止んだ。時計を出して見れば、成程五時になっている。約束の時刻までには、まだ三十分あるなと思いながら、小さい卓の上に封を切って出してある箱の葉巻を一本取って、尖を切って火を附けた。

不思議な事には、渡辺は人を待っているという心持が少しもしない。その待っている人が誰であろうと、殆ど構わない位である。あの花籠の向うにどんな顔が現れて来ようとも、殆ど構わない位である。渡辺はなぜこんな冷澹な心持になっていられるかと、自ら疑うのである。

渡辺は葉巻の烟を緩く吹きながら、ソファの角の処の窓を開けて、外を眺めた。窓の直ぐ下には材木が沢山立て列べてある。ここが表口になるらしい。動くとも見えない水を湛えたカナルを隔てて、向側の人家が見える。多分待合か何かであろう。往来は殆ど絶えていて、その家の門に子を負うた女が一人ぼんやり佇んでいる。右のはずれの方には幅広く視野を遮って、海軍参考館の赤煉瓦がいかめしく立ちはだかっている。

渡辺はソファに腰を掛けて、サロンの中を見廻した。壁の所々には、偶然ここで落ち合ったというような掛物が幾つも掛けてある。梅に鶯やら、浦島が子やら、鷹やら、どれもどれも小さい丈の短い幅なので、天井の高い壁に掛けられたのが、尻を端折ったよ

うに見える。食卓の拵えてある室の入口を挟んで、聯のような物の掛けてあるのを見れば、某大教正の書いた神代文字というものである。日本は芸術の国ではない。

渡辺は暫く何を思うともなく、何を見聞くともなく、ただ烟草を呑んで、体の快感を覚えていた。

廊下に足音と話声とがする。戸が開く。渡辺の待っていた人が来たのである。麦藁の大きいアンヌマリイ帽に、珠数飾りをしたのを被っている。鼠色の長い着物式の上衣の胸から、刺繍をした白いバチストが見えている。ジュポンも同じ鼠色である。手にはヴォランの附いた、おもちゃのような蝙蝠傘を持っている。渡辺は無意識に微笑を粧ってソファから起き上がって、葉巻を灰皿に投げた。女は、附いて来て戸口に立ち留まっている給仕を一寸見返って、その目を渡辺に移した。ブリュネットの女の、褐色の、大きい目である。この目は昔度々見たことのある目である。しかしその縁にある、指の幅程な紫掛かった濃い暈は、昔無かったのである。

「長く待たせて。」

独逸語である。ぞんざいな詞と不弔合に、傘を左の手に持ち替えて、おおように手袋に包んだ右の手の指尖を差し伸べた。渡辺は、女が給仕の前で芝居をするなと思いなが

ら、丁寧にその指尖を撮まんだ。そして給仕にこう云った。
「食事の好い時はそう云ってくれ。」
給仕は引っ込んだ。
女は傘を無造作にソファの上に投げて、さも疲れたようにソファへ腰を落して、卓に両肘を衝いて、黙まって渡辺の顔を見ている。渡辺は卓の傍へ椅子を引き寄せて据わった。暫くして女が云った。
「大そう寂しい内ね。」
「普請中なのだ。さっきまで恐ろしい音をさせていたのだ。」
「そう。なんだか気が落ち着かないような処ね。どうせいつだって気の落ち着くような身の上ではないのだけど。」
「一体いつどうして来たのだ。」
「おとつい来て、きのうあなたにお目に掛かったのだわ。」
「どうして来たのだ。」
「去年の暮からウラジオストックにいたの。」
「それじゃあ、あのホテルの中にある舞台で遣っていたのか。」

「そうなの。」
「まさか一人じゃあるまい。組合か。」
「組合じゃないが、一人でもないの。あなたも御承知の人が一しょなの。」少しためらって。「コジンスキイが一しょなの。」
「あのポラックかい。それじゃあお前はコジンスカアなのだな。」
「嫌だわ。わたしが歌って、コジンスキイが伴奏をするだけだわ。」
「それだけではあるまい。」
「そりゃあ、二人きりで旅をするのですもの。丸(まる)っきり無しというわけには行きませんわ。」
「知れた事さ。そこで東京へも連れて来ているのかい。」
「ええ。一しょに愛宕山(あたごやま)に泊まっているの。」
「好く放して出すなあ。」
「伴奏させるのは歌だけなの。」Begleiten(ベグライテン)という詞(ことば)を使ったのである。伴奏ともなれば同行ともなる。「銀座であなたにお目に掛かったと云ったら、是非(ぜひ)お目に掛かりたいと云うの。」